

## 「誰の身にも起こり得る災害」

千葉県 君津市立周西南中学校 3年 <sup>すみこし</sup>隅越 <sup>しゅんすけ</sup>俊介

「経験したことのないような異常な現象が起きそうな状況です。ただちに命を守る行動をとってください。(後略)」気象庁は、このような『特別警報』の運用をスタートさせた。地球温暖化を伴う気象変動は、ここまでしなければならなくなったのだ。そう考えると、僕は強い危機感を覚えた。

この夏だけでも、集中豪雨による土砂災害のニュースを何度目にしたことだろう。中には、たった半日で1か月分の雨量を上回った場所もあった。まるで川のように濁った水が流れる道路。大量の土砂に襲われ、住居の跡形すらない集落。信じられないような映像に、僕は大きな衝撃を受けた。

また、北海道で生活している姉も帰省した時、こんな話をしてくれた。周りは木々に囲まれ、電車以外での交通手段がない所で、土砂崩れが起き、電車は走行不能になった。乗客は雨の中、荷物を持って線路上を2キロも歩いて、バスの待つ踏切まで移動したという。復旧作業も相当困難であったに違いない。自然の景観を楽しめる路線を利用する間にも、突然、土砂災害に遭遇することもある。そんな現実、どう向き合ったらよいのだろう、自分にできることは何だろう、考えさせられた。

この数10年、僕の住んでいる地域は大きな災害を経験していない。僕は心配ないと思いながらも、市のハザードマップを調べてみた。安全?とんでもない。土石流や崖崩れ、浸水の危険にさらされている箇所は数え切れないほどあった。指定避難場所くらいは知っていたが、そこに行くまでの経路(橋や崖、水路がない道)非常時の家族との連絡方法などは考えたこともなかった。市街地は大丈夫だろうと、油断しきっていた自分自身に呆れてしまった。

この「油断」が命取りになることを、僕は思い知らされた。今夏、不運にも土砂災害に見舞われながら、何とか命が助かった方々には共通点があった。それは、雨の様子・山や川の状態について充分把握し、必要な行動がとれていたということだ。高齢者の中には、歩くのに時間がかかるから早めに自主避難をした人もいた。若者の中には、最近、利用者が急増しているLINEに助けられた人もいた。川の水位上昇をLINEの映像を見たことで、危険の切迫を察知し、避難したというのだ。若者の家は、防災の放送が聞こえにくいそうだが、この情報のおかげで難を逃れたという。避難して間もなく、その家には土砂が押し寄せた。その土砂の片づけを手伝ってくれたのも、LINEの仲間たちだったというから驚いた。「本当に助かった。」と喜ぶ住人の笑顔が忘れられない。今回のことで、避難を呼びかける手段は防災放送やテレビ、ラジオだけではないことがわかった。防災も時代のニーズに合わせて進化し、より有効な対応が出てくるだろう。

今まで、自分とは関係がないと思っていた災害。しかし、いつ、どこで、誰の身に起こってもおかしくないのだということがわかった。災害とは、実は非常に身近なものなのだ。「これまで何もなかったのだから、自分の所は大丈夫だろう。なんて思っている人は、僕の他にもいるだろう。こんな油断は自分自身を、そして大切な家族を、命の危険にさらしかねない。今まで、災害に遭った人が、ではなく、災害に遭わなかった人が、たまたま運が良かっただけなのだ。そう視点を変えてみると、非常時に備え、災害が発生する前に知っておくべきこと、やらなければならないことが見えてくるのではないだろうか。

災害は、規模はもちろん、地形や自然環境等の違いから、ひとくくりにはできない。当然、その対策も変わってくるだろう。まず僕は、自分の住む地域について、もっと理解を深めたい。そして、いざという時のために何を備え、どう行動すればより安全かを家族で話し合っておきたい。また、災害時は、近所同

士が声をかけ、助け合っていくことが非常に重要だという。日頃から近所の皆さんと良い関係を築き、僕にもできる地域活動には積極的に協力していきたい。

災害が起こってしまうことは仕方がない。ただ、その可能性を少しでも減らす努力はできるだろう。根本的な要因とも考えられる地球温暖化の深刻な状況から目をそらさずにいたい。ささやかかもしれないが、ゴミを減らす努力、節水・節電をする努力、なるべく車に頼らず生活する努力、自分にできることは実行していきたい。一人ひとりの心がけこそ大きな意味があると信じ、僕はこれらを継続していきたい。

これから台風シーズンが到来する。災害が起こらないことを祈りながら、今まで以上に気象情報に耳を傾けていこうと思う。